

青海千里洞概念

松本 澄夫

日本最深、垂直290mのとてつもなく大きいこの洞窟をみるなり、今迄の考え方を一変させてしまう偉大な魅力をもつた堅穴である。

洞窟であれば我武者羅に前進するのみ、それが地下水のプールでも、また細くてアバラ骨を締めつけるような匍匐前進の場所でも、洞の奥に辿り着き一探検家の気分に関することを唯一の楽しみにしていたが、この洞が我々の活動そのものの転換を余儀なくさせた。

洞内はオーホールに雪溪が大きく胡座をかいているため、真夏にても気温3度、水温4度という悪条件、それに加えて水温4度の雪溶け水を頭から被りながら70mの垂直壁をワイヤーバシゴで登り降りするこの冒険的(技術的)要素の大であるこの洞も、洞口周囲の40mもある石塔原、直径110mあるドリーネ(この周辺には幾つもある)をみると、頭のトレーニングを必要と感じさせる。このことが過去3回の活動により勝ち取った教訓でもあった。

このような特徴をもつた青海千里洞の置かれている位置を地理的位置と地質的位置を中心として区分してみる。

地理的に青海は富山・長野両県に接する新潟県の最西端の町であり、青海小穴は北アルプスの北縁、黒姫山の東南東に位置する。

青海は東に交通の要所糸魚川、西には親不知を控えた町であり、産業は石灰石採掘に伴うセメント工場、化学工業の町である。商業・文化圏は関西・関東の分岐点であると同時に、地形的にも糸魚川―静岡の中央構造線上にも位置する日本の分岐点である。

青海駅から30分、黒姫山(1222m)の麓、日本石灰工場前につく。これが福来ケロという鍾乳洞(入洞可能約1000m)である。右に雄大な黒姫山をみつめながら登れど一向に進まない。カラ沢とブツシュに悩まされ、またフトコロ(平らな谷間)にでると無風状態の中での直射日光にテンカンになりそう。肩にくい込む荷が全身をシビレさす。わずか5kmの行程であるがオー一回の活動では、人つ子一人として通つたことのない状態の踏み分け道をブツシュをかき分け、切り倒し道を作つて進まねばならなかつたが、フロンティア精神が探検部の進む道と信じ、悪戦苦闘、テント場に辿りついたのは何と三日後であつた。太陽が昇つて行くのを忘れていたかの如く精魂尽き果てた感が強く、隊員全部が二度と来るまいと肝に銘じたマイコミ平であつた。

このマイコミ平は200×400m程の谷間のボリエであるが、マイコミの名称は水が地下水となつて舞い込んでいくということから名付けられた。上流からの沢は3つの大きいマイコミ(大マイコミ、小マイコミ、新マイコミ)に吸い込まれている。故に我々の登つてきた沢がカラ沢であつても無理はない。

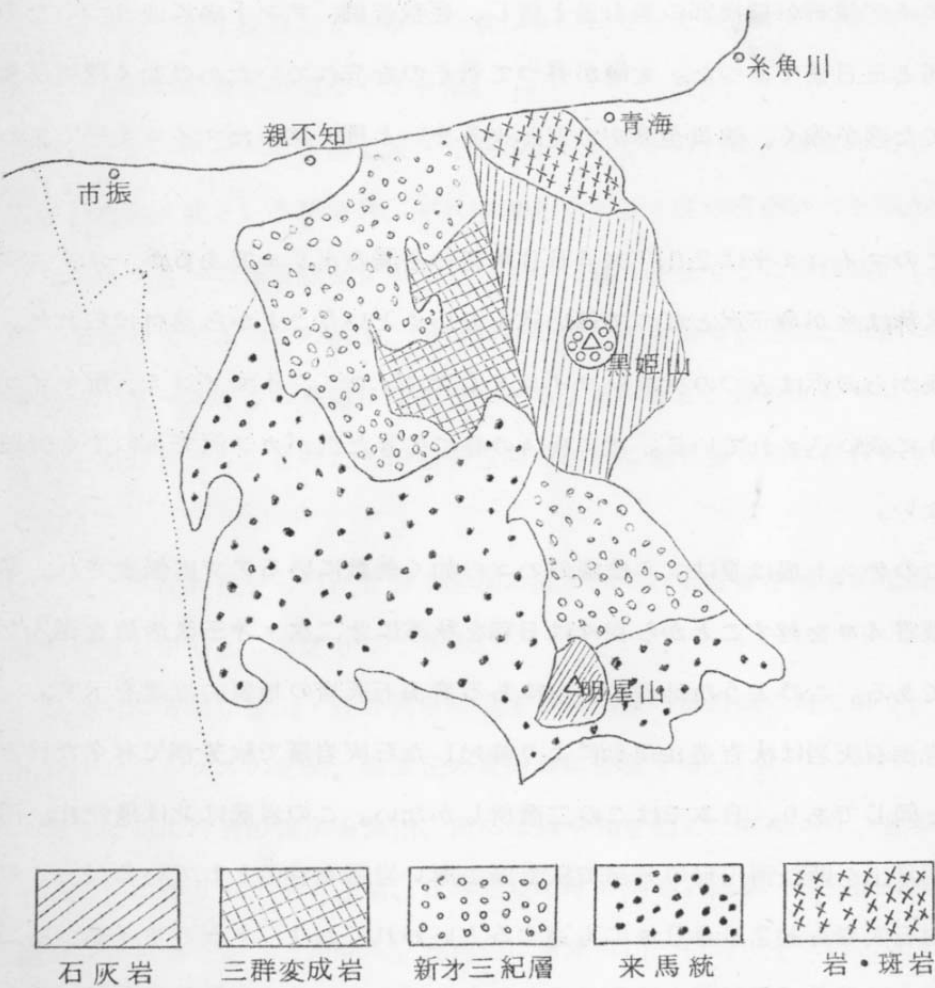
このテント場は夏はゴミ捨場のハエの如く無数にいるアブに悩まされ、冬は積雪4mを越すことから我々は日程を秋季に才二次・才三次活動を選んだのである。このような地理的位置にある青海石灰岩の地質的位置を示す。

青海石灰岩は秋吉造山運動により隆起した石灰岩層で秋芳洞で有名な秋吉台と同じであり、日本ではこの二箇所しかない。この岩層は北は黒姫山、南は明星山を囲む楕円形の地層で秋吉層が厚い岩層を特徴としているが、この青海石灰岩も約2,000mにも達するといわれており、トールネイ期から二疊期(2億7千万年前)に形成されたものである。この岩層の特徴は大量の化石を含有していること。主なものは、有孔虫、珊瑚虫、二枚貝、巻貝、海

百合などの豊富な化石群である。化石分布の簡単なものは次の如くである。

- 上部帯 フズリナ・珊瑚虫
- 才二帯 腕足類・海百合
- 才三帯 巻貝・海百合・二枚貝
- 下部帯 腕足類

青海石灰岩と周囲地質略図



青海千里洞周辺洞窟のうち、確認したもののうちめぼしいものだけを图示した。

この附近には、8,000個にのぼるマイコミがあるといわれている如く、ドリーネは無数にみつか。その何れもが堅穴で、一つの地下水系に集つて

